static fragment (broken trunk) oil on canvas

3 May 2025 改稿 (7 August 2024)

SS_WT_2024

# 初禊 行

ぬるく流れる川の水に足を浸した。冬の名残りか、肌を刺すような冷たさだった。ここは、ずいぶんと遠くまで来てしまったようだ。ふと、自分がどこから来たのかも、何のためにここまで来たのかも、思い出せなくなっていた。ただ、この川を渡らなければならない、という強い衝動だけが、胸の奥で燃えていた。

ゆっくりと、一歩、また一歩と、足を進める。水は、思ったよりも重く、まとわりつくような抵抗を感じる。まるで、過去の記憶が、この水に溶け込んでいるかのようだ。

ふと、対岸に、ぼんやりとした人影が見えた。その人影は、こちらを静かに見つめている。誰だ、あれは。自分か、それとも、別の誰かか。問いかけようとしても、喉が乾いて、声が出ない。

人影は、ゆっくりと、こちらに向かって、手を差し伸べるような仕草をした。その手は、まるで、この川の流れそのもののように、滑らかで、冷たそうに見えた。

私は、その手を、取ってしまうのだろうか、と、ぼんやりと考えた。取ってしまえば、この川を渡り、あの人影のいる場所へ、たどり着けるのだろう、という、根拠のない確信が、胸を締めつける。

しかし、足は、動かない。まるで、この川の、冷たい流れに、根を張ってしまったかのように、ここから、一歩も、動けない。

人影は、ゆっくりと、その手を、こちらへ、引き戻した。

私は、ただ、その、遠ざかっていく、冷たい、手を、見つめていた。

川を渡ることは、できなかった。

私は、ただ、この、ぬるく、冷たい、川の、ほとりに、立ち、遠い、あの、人影を、見つめ、問いかけ、そして、何も、得られず、ただ、時を、過ごした。

この、問いかけ、そして、何も、得られない、という、感覚、それ、こそが、この、川を、渡る、ということ、なのだ、と、ぼんやりと、思った。

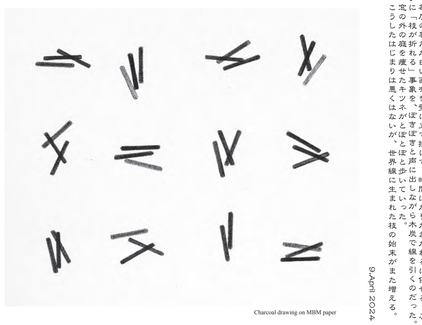
答えは、ない。ただ、この、問いかけ、そのものが、この、川を、渡る、ということ、なのだ、と、ぼんやりと、思った。

# 黒樹脂 枯木 宵魔

sticks in the static / walking tree 2025 / silicon carbide, black walnut sticks,oil on canvas

9 April 2024

# 揺舞い



Charcoal drawing on MBM paper

# 家族

家族とは、血のつながりだけを、意味するのだろうか。いや、違う、と、私は、思う。家族とは、共に、時を、過ごし、共に、笑い、共に、泣き、そして、共に、生きる、ことを、選んだ、人々、の、ことを、指す、のだ、と、私は、思う。

私の、家族は、少し、変わっている、かもしれない。父は、物、を、作る、ことが、好きな、職人、だ。母は、その、物、を、愛する、ことが、生きがいの、ような、人、だ。そして、私は、その、両親、の、間に、生まれた、一人、の、子、だ。

父は、口、が、重い、人、だ。多、く、を、語、る、ことは、ない、が、その、背、中、は、雄、弁、だ。母は、その、父、の、背、中、を、ただ、黙、って、見、つめ、ている、ような、人、だ。私は、その、両、親、の、間、で、笑、い、泣、き、怒、り、そして、学、んだ。

家族、とは、時、に、重、い、荷、物、に、なる、ことも、ある、だろう。期、待、や、責、任、や、愛、情、が、絡、み、合、って、時、に、息、が、詰、まる、ような、ことも、ある、だろう。

しかし、私、は、思、う。その、重、さ、こそ、が、家、族、を、家、族、たる、ものに、する、のだ、と。

家、族、とは、共、に、過、ごす、時、間、の、ことだ、と、私、は、思、う。食、事、を、し、、眠、る、ことの、ない、ような、ささ、やか、な、日、々、の、ことだ、と、私、は、思、う。

家、族、とは、共、に、笑、う、ことの、できる、ささ、やか、な、ことが、ある、ことだ、と、私、は、思、う。

家、族、とは、共、に、泣、く、ことの、できる、ささ、やか、な、ことが、ある、ことだ、と、私、は、思、う。

家、族、とは、共、に、怒、る、ことの、できる、ささ、やか、な、ことが、ある、ことだ、と、私、は、思、う。

家、族、とは、共、に、学、ぶ、ことの、できる、ささ、やか、な、ことが、ある、ことだ、と、私、は、思、う。

家、族、とは、共、に、生、きる、ことの、できる、ささ、やか、な、ことが、ある、ことだ、と、私、は、思、う。

家、族、とは、共、に、死、ぬ、ことの、できる、ささ、やか、な、ことが、ある、ことだ、と、私、は、思、う。

家、族、とは、共、に、生、まれ、る